

# 『三国史記』 「地理志」 の高句麗地名漢字

— おもに日本語との比較による考証 (四) —

高 木 雅 弘

## はじめに

前回は、高句麗語の音韻変化の特徴のひとつ、「音位転換」について説明させていただいたが、今回は非鼻音化、および鼻音の消失についての問題を扱うこととした。特に、鼻音の消失については、日本語との比較によってその可能性を見いだせたものである。

また、漢字の表記にともなう問題として、複数のことばの合成語のうち、その分析が必ずしも漢字の音節の切れ目と一致していない例もとりあげた。このことも音位転換と同じく、高句麗語の解釈に困難をもたらしてきたと考えられる。

今回も前回と同じく、使用した東洋文庫所蔵の資料は、以下の通りである。煩を避けるため、それぞれ①、②、③の刊本のように呼ぶこととしたい。( ) 内の数字は東洋文庫蔵書の請求記号である。

- ① (VII-2-134) 『三国史記』 五十卷〔高麗金富軾奉宣撰、朝鮮刊【太祖三(明洪武二十七)年跋】鑄字印補寫〕
- ② (VII-2-804) 『三国史記』 五十卷〔高麗金富軾奉宣撰、昭和六年、京城、古典刊行会景印〕
- ③ (VII-2-1018) 『三国史記』 五十卷・附『三国史記異體字類』〔高麗金富軾奉宣撰、日本坪井九馬三・日下寛校、大正二年刊、東京、文科大学史誌叢書之一〕

今回も巻数のみを掲げたものは、原則的に『三国史記』の巻数(例、巻第37)を指している。高句麗語と日本語の比較例を示す場合は、高句麗語を「高」と、(上代)日本語を「日」と略称することとした点は、これまでと同じである。

不等号の記号は、開いている側が古い形で、閉じた側が新しい形であることを示し、ローマ字表記の左上のアスタリスクは、理論的に再構された音であることを示す(例、「奈兮」\*nahe < \*lahi < \*laθi < \*θila《白》)。また参考資料について、前三回のもものと重複するものについては、今回も割愛させていただいた。

## 1. 非鼻音化

「多」

高句麗語で「多」ta と表記されたことばの中には、日本語の「ナ」と対応する例が見られる。「奴」no か「那」na の誤記の可能性を考えたこともあったが、明らかに非鼻音 (d ~ t) の文字で表記されているものと通用している例が見られる。このような非鼻音化は、方言の違いにもとづくものか、記録者の音声認識の違いにもとづくものかについては、まだ不明な点が残る。

### a. 「多知忽」《大谷》

巻第37の「地名表」には、「大谷郡、一云多知忽」(大谷郡、あるいは「多知忽」といふ)とある。(李氏)朝鮮時代前期以前の「知」は、ci (= tci / tʃi)ではなく、tiのように読まれたことは間違いない。したがって、「多知」は ta.ti のような発音であったと考えられる。

「多知」が《大谷》(「~忽」は《城》)をあらわしていたのであれば、高句麗語では《長、大》は「内」「奈」nɒj (= \*nɒ < \*na)となるはずであり、「多」ta《大》は非鼻音化した例として認められる。

内米忽、一云池城、一云長池。(内米忽、あるいは「池城」といひ、あるいは「長池」といふ)(巻第37「地名表」)

奈吐郡、一云大提(奈吐郡、あるいは「大提」といふ)(同上)

上の「内米忽」は、直訳すれば《長池城》となろう。「米」の音 mi は、上代日本語の万葉仮名では「エ列乙類」の「メ」më (< \*mai) の

音をあらわす文字で、「買」 $m\Delta j$  (= \*me) 《水、川》と共通の要素であろう。その下の「大提」の「提」(音「吐」)は、他の例から見て、「隄」(「堤」の異体字)の誤記であろう。

高句麗語そのものではないが、高句麗に隣接する地域の言語として、鼻音  $n$  に対する非鼻音  $t$  (または  $d$ ) の対応関係が認められる例を取り上げたいと思う。

西暦五世紀末ごろ、高句麗の北方に「勿吉」(ブッキツ)という国が出現したが、その地名に「徒太山」という山が出てくる。勿吉の言語とされることばで意味が明白なものとしては、唯一といってもいいかもしれない。

國南有徒太山、魏言大白。… ([勿吉] 国の南に「徒太山」あり、魏 [= 中国] に《大白》と言ふ) (『魏書』 卷100、勿吉傳)

『魏書』(北朝の北魏を扱った史書)では「徒太」が《太白》ではなく、《大白 (= 大きく・白い)》であることに注意する必要がある。唐代に編纂された『北史』では「太皇」となっているが、これはその時代に流行した道教の影響による'修正'であろうか。この「徒太山」が、はたして現在の「長白山」(朝鮮語名「白頭山」)であったかどうかについては疑問点がなくはないが、ここでは純粋に音・義の解釈に徹することとした。

「徒」 $to$  が《大》を意味したとすれば、高句麗語の「奈」《大》、「内」《長》(いずれも  $n\Delta j$ ) と対応し、さらに日本語の「ナガ(シ)」《長》とも対応し得る。「徒」 $to$  の母音も  $a$  より狭いが、非円唇性の  $\Delta$  に近い音 (\* $t\Delta$  ~ \* $d\Delta$ ) だったのではないか。高句麗語の出発形は \* $na$  であるが、日本語の形を考慮すれば、\* $nan[g]a$  のうしろの鼻音が語頭の  $n$  に同化して \* $nana$  となり、重音省略で単音節の \* $na$  になったと考えられる。

うしろの「太」 $t'ai$  《白》も高句麗語「奈兮」\* $nahe$  《白》、日本語「シロ」(合成語では「シラ〜)《白》と対応し得る。

「太」 $t'ai$  < \* $dahi$  < \* $la\theta i$  < \* $\theta ila$  / 「奈兮」\* $nahe$  < \* $nahi$  < \* $la\theta i$  < \* $\theta ila$   
『魏書』によれば、勿吉の言語は「独異」(周辺とは異なる)というこ

とであるが、これは勿吉を三世紀の「挹婁」(ユウロウ)という民族の後継者であると認識したために、前代(=曹魏時代)の記述の影響を受けたのであろう。

其人形似夫餘、言語不與夫餘句麗同。(其〔=挹婁〕の人形〔じんけい=容姿〕は夫餘に似て、言語は夫餘・句麗と同じからず)(『三國志』卷30「魏書」東夷傳・挹婁)

上の記述からは挹婁の言語が夫余・高句麗と、いわゆる比較言語学的にまったく無関係であったと断定はできないにしても、夫余・高句麗とは単に方言的な違い以上の、意思の疎通ができない程の差異があったことがわかる。同時に、夫余と高句麗が言語的に同系(同じ語派)であったこともわかる。そうであるなら、この山の北側(松花江の流域)でも高句麗の'南界'(朝鮮半島中部地域)の地名と共通の系統の言語が使用されていたことになる。地理的に見れば、夫余も勿吉も高句麗本国の北に接していたことから、夫余の遺民のことばが後に勿吉の言語の一部に採用された可能性が高い。

はじめにもどると、次の《谷》をあらわすことばは、高句麗地名では「吞」<sup>tʰʌn</sup>、「頓」<sup>ton</sup>、「旦」<sup>tan</sup>という表記が見られるが、三種類の表記が共存していたことにより、母音は a よりも狭いが非円唇性の <sup>ʌ</sup> に近い \*<sup>tʰʌn</sup> のように読まれていたと考えられ、「知」<sup>ti</sup> とは発音がことなる。

高句麗語では二音節以上のことばの第二音節以降の母音が弱化する傾向があることを考えると、「多知」<sup>ta.ti</sup> (= \*<sup>ta.ti</sup>) は \*<sup>ta.ta</sup> のような音にさかのぼり得る。高句麗語では同じような音が重なった場合、省略する傾向(重音省略 = haplology)があるので、「多」<sup>ta</sup> と「知」<sup>ti</sup> はそれぞれ別の要素の合成であった可能性が高い。「知」は、おそらく接尾辞的に付加され、「多」とひとつのことばのようになったため、母音が弱化したのであろう。同時に、第一音節の <sup>ta</sup> も \*<sup>tʰʌ</sup> とならず母音 a が保存される形となったのであろう。

同様の例として、「乃勿」\*<sup>na.mil</sup>《鉛(=青・金)》の「~勿」も、接尾辞的に付加された要素のため、\*<sup>+mal</sup> のような形から母音が弱化した

ものであろう。これは《鉄》をあらわす「毛乙」*mo.il* (修正形 *\*mAl*) や日本語の「ナマリ」《鉛》の「～マリ」(独立した形としては消滅) と対応し得る。

そして、「多知」のうしろの「知」*\*ti* が *\*tan* の収縮と見られるかどうかが問題になるが、「知」の後ろにある「～忽」+hol《城》の頭子音 *h* (または軟口蓋摩擦音 *x* = 喉の奥から出すハ行の音、もとは *\*k* か) の影響によって、*\*tan* の末尾の歯茎鼻音 *n* が軟口蓋鼻音 *ŋ* (舌尖を上歯茎の裏に付けない「ン」の音) に変化したことが考えられる。+hol については分離可能な要素と見て、母音弱化の影響は少なかったのであろう。

*\*na.tan+kol > \*[n]da.tAŋ+hol > \*ta.tiŋ]+hol*

高句麗語では語末 (または音節末) の鼻音 *ŋ* が消滅している例が確かに存在しているので、「知」*\*ti* も *\*tan* の収縮と見ることは可能であろう。

「省」*sjəŋ* (「城」と同音) > 「西」*sjə*《城》(「助利非西」《北扶餘城州》)

「朱蒙」*cuməŋ* (修正形 *\*cuməŋ*) > 「鄒牟」*cumo* (> *\*cum[u]*)《人名 (高句麗の始祖)》

「朱蒙」は、夫余の始祖名「東明」と音韻的に関係があるように見える。おそらく *\*tūŋmən* に近い音から変化したことが想定される。『三国史記』「高句麗本紀」に見える別名「衆解」*\*cuŋ.he* は、「鄒牟」(『好太王碑文』) のさらなる収縮形に《王》をあらわす「皆」*\*ke* (< *\*ki*) が付加されたものであろう。

「東明」*\*tūŋmən* > 「朱蒙」*\*cuməŋ* > 「鄒牟」*\*cum[u]+ki* > 「衆解」*\*cuŋ.he*

## b. 「多勿」

高句麗語で《壤》をあらわすことばは「奴」*no*, 「内」*nA* (修正形 *\*nA*) になるが、これも非鼻音化した形が存在する。ただし、「地理志」の地名ではない。

麗語謂復舊土爲多勿。(〔高句〕麗語《復旧土》を謂ひて「多勿」となす) (『三国史記』卷第13、「高句麗本紀」第一、東明聖王二年)

不可解なのは、高句麗の建国者朱蒙が夫余（または扶余）から亡命して、新たにたどり着いた吉林南方の土地（渾江の流域か）を「多勿」《復旧土》と称していることである。後漢の王充の『論衡』「吉驗篇」の記述にあやまりがなければ、夫余の王族にとって、'旧土（＝故郷）'と呼べるのは夫余の南方ではなく、北方の土地（橐離國）ではないかと思うが、どうであろうか。

まず、「多」ta《土》は「奴」「内」《壤》、および日本語の「ナ」《土地》（「ナキ」《地震》参照）、満州語を中心とする南方トゥングース諸語 na《土地》と対応すると考えられている<sup>(1)</sup>。なお、《世》を意味する古代新羅語「内」（この場合は \*nuj であろう）、中期朝鮮語の nuj / nuri（祖形は \*nūri か）は、意味的に距離があるのみならず、母音の種類が違うように見える。

後ろの「勿」+mül《復（する）》は、日本語の「モド・ル」《戻》の発音に似ているが、これは上代語では存在が確認されない。また、漢語の語順（動詞＋目的語）から言えば、《復（～）》は他動詞「（～ヲ）モド・ス」ではあっても、自動詞「（～ガ）モド・ル」ではない。よく似たことばとして「モトホ・ル」《廻（＝めぐる、まわる）》（他動詞「モトホ・ス」《めぐらす、まわす》）があるが、これは「ミ・ル」《廻（＝めぐる）》の語幹「ミ」mī の異形、「モ～」mö+ と「トホ・ル」（他動詞「トホ・ス」）《通》の合成語であろう。この「ミ」mī（< \*mōj）が高句麗語で「勿」mül の形であらわれたと考えられる。

mül < \*mə:l < \*muəl' < \*müälj < \*mōj

上代日本語の「イ列乙類」の発音は、ほとんど例外なく高句麗語の語末・音節末で流音になっている。同様の音韻変化をした例として、次のようなものがある。

高、「～乙<～勝」+il < +hīl < \*kīl < \*kə:l < \*kuəl' < \*küälj < \*kōj  
《木》：日、「キ」< kī < \*kōj《木》（合成語「コ～」kō+）

高、「～忽」+hol < 「溝漚」\*kol < \*kulj < \*kuj《城》：日、「キ」< kī  
< \*kuj《城、柵》（「ク・ヘ」《柵辺》）

おもしろいことに、「火」の訓読「弗」pīl（「屈火」＝「屈弗」）も、こ

の特徴に合致している。

日、「ヒ」(合成語では「ホ～」fo+) < fi < \*poj 《火》

## 2. 鼻音の消失

次に、日本語の「ナ行」の子音nにあたる音が高句麗語で消滅している例をあげたいと思う。おそらく、この祖形の音は普通のnではなく、硬口蓋音のn' (ニャ、ニュ、ニヨの子音の部分 ɲ) であった可能性が高いと見られる。

### a. 《似》

卷第37の李勣の上奏文(「李勣奏状」)によると、西暦七世紀頃の高句麗語では《似る》を「史」といったようである。

似城、本史忽。(卷第37、鴨渚以北、打得城三)

「似」と「史」は、いずれも sɿ と読まれるので、「史」は漢語「似」に起源をもつ同音の'当て字'であろう。しかし、三世紀の高句麗語では別のことばが使われていた。

句麗呼相似爲位。(句麗、《相ひ似たる》を呼びて「位」となす)(『三国志』卷30、「魏書」東夷伝・高句麗)

当時の高句麗王「位宮」が、その祖父の「宮」(王の名)に'似ている'ので「位宮」と名付けられたと解説している。高句麗語の通常の語順では動詞は目的語の後に置かれたと考えられるので、「位」が動詞であれば、「宮・位」のようになった可能性が高い。そうならない点を考えてみると、「位」は名詞を修飾する用法で使われたか、当時の中国の読書人に理解されやすい語順に'修正'されたのかもしれない。

母音の対応から見ると、これは日本語の「ニ・ル」(連用形「ニ」)《似》の異形、「ノ・ル」の語幹「ノ」(< nō-) と比較できるかもしれないが、

《相似 (=互いに似る)》という意味を厳密に解釈すれば、「ニ・ル」《似》の連用形「ニ」と「ヨ・ル」《寄 (=近づく)》の語幹「ヨ」の合成語の可能性もある。

\*ni+jö- / \*n'ö- > \*n'üä- > \*jüä- > \*uə-

「位」(中古音 jwi) は、おそらく \*jüä- か \*uə- の音を表記したものである。明らかに円唇性の母音 u (~ ü) の存在が認められる。また、三世紀当時の漢字音については不明な点があるが、「位」の語末が juei ~ wai のように i で終わっているのであれば、何らかの接尾辞の痕跡として認められるかもしれない。

#### b. 「也尸」《狷

《狷》は、気候・風土から考えて《猩猩 (シウジョウウ = 大型のサル)》ではなく、《鼯 (イタチ)》の異体字であろう。これは日本語の「ネ」(< \*nia) 《鼠》と対応し得るが、本来は小型の獣を指したのかもしれない。

狷川郡、一云也尸買。(狷川郡、あるいは「也尸買」といふ)(巻第37「地名表」)

「也尸」jal は \*n'ia.ra のような祖形を再構し得るが、日本語の方言形には「ネ」《鼠》以外に、「ネラ」(「ノ・ネラ」《野ネズミ》) の存在が注目される<sup>(2)</sup>。

上代日本語の「ネ」は、「甲類」(ne) と「乙類」(nè) の区別が失われている。甲類の場合は \*nijja のような祖形を再構できるが、乙類の場合、合成語では「ナ～」の形をとることが想定され、\*naj のような祖形を再構できる。《鼠》では「ナ～」のような合成語が確認されないので、\*nija ~ \*n'ia のような祖形であった可能性が高い。

#### c. 「於斯」《斧

《斧》をあらわす「於斯」も、日本語との比較から鼻音ではじまっていた可能性が高い。



於斯内縣、一云斧壤。(於斯内縣、あるいは《斧壤》といふ)(巻第37「地名表」)

「於斯」<sub>a.s</sub>《斧》の「～斯」(= \*+s < \*+sa)は指小辞で、日本語の接頭辞「サ～」《小～、狭～》と対応し得るが、高句麗語では接尾辞の形になる。日本語「ヲノ」《斧》の「ヲ～」《小～》も小さいものをあらわす接頭辞であろう。

日本語「ヲノ」《斧》の語根「ノ」は、上代語では「オ列乙類」の「ノ」*nö*になる。高句麗語「於斯」の「於」<sub>a</sub>が日本語「ノ」と対応するのであれば、その祖形は \**n'ö* か \**n'ä* の形が考えられる。

「於(斯)」<sub>a</sub> [ɨ] < \**uə* < \**jüä* < \**n'ö* / ə < \**jə* < \**jä* < \**n'ä*

なお、《小形の斧、手斧》を意味する日本語「ヨキ」については、上代語の形が不明であり、「ヨ」が「於」に似ているとしても、「キ」の説明がつかない。

#### d. 「乙省」《烽》

《烽》を意味する「乙省」は、日本語の「ノロシ」《狼煙》にあたる。上代日本語では、《烽》は「トブヒ」(< 飛・火)という形で出現し、「ノロシ」ということばの存在は確認されないが、《(危急を)知らせる、伝える》ということで、「ノ・ル」《宣、告》という動詞の未然形「ノ・ラ」に、さらに使役をあらわす助動詞が付加されて変化(= 母音調和?)したたのが、「ノロ・シ」であろう。

高句麗語の「乙」<sub>il</sub> が日本語の「ノ・ル」《宣、告》の未然形に対応するとすれば、語頭の子音は硬口蓋音 *n'* (= *n*) であった可能性が高い。

*il* < \**ər* < \**uə.rə* < \**jüä.rä* < \**n'ö-ra*

「省」<sub>sjəŋ</sub> (「城」と同音)は《城》と解釈され得るが、もし、「省」の二種類の音のうちの別の音 *sΔiŋ* のように読まれたとすれば、使役をあらわす日本語の助動詞「(～セ)シム」《～させる》の未然・連用形「シメ」(< *simë*) と関連づけられるかもしれない。

「省」<sub>sΔiŋ</sub> (= \**se.M*) < \**se.mīn* < \**se.mil* < \**si.mΔlj* < \**si+maj* ?

ただし、その場合は「シ」と「メ」がそれぞれ別の要素の合成であることが条件になる。また、なぜ「生」saiŋではなく、「省」の字で表記されたのかという点も疑問が残ろう。

### 3. 誤分析、または異分析

以前、高句麗の漢州に属する「釜山縣」の別名「松村活達」から、「釜山」の音読 pu.san は《松》をあらわす pu.s（「夫斯」）と《村》をあらわす an に分析すべきこと、「活達」hwal.tal は《釜・山》を意味する高句麗語の訓読であることを提案したことがあった（『東洋文庫書報』48号、拙論12、13頁）が、高句麗地名には、他にも表記された漢字の音節とは異なった分析の例が存在する。

#### a. 「烏斯押」《猪迺穴》

これについては前篇（同上『書報』51号、62頁）でもふれたが、《猪》をあらわすことばが「烏斯」o.sʌ（修正形 \*o.s）であるなら、「押」ap は《迺・穴》になる。これはおそらく \*a.ap という二つのことばの収縮形で、うしろの .ap が《穴》にあたり、語頭（および単独形）では「甲」\*kap となる。

\*a.ap の前の a は《迺》を意味することばになるが、語頭および単独形では「加」ka になる。これも「烏斯」のうしろに置かれたため、語頭の k が（おそらく h の段階を経て）消滅したと考えられる。

迺城郡、一云加阿忽。（迺城郡、あるいは「加阿忽」といふ）（巻第37「地名表」）

もし、《迺》が《辺》を意味することばであるなら、日本語の「サカ・ヒ」《境、界》の語幹と対応し得る。

\*ʔaka > \*kaθa > \*ka[h]a > ka[:] > \*+[h]a

ただし、《猪迺穴》の《迺》を《辺》と訳すと、意味的に通じたい所がある。むしろ、「烏阿忽」《津臨城》の「阿」a（おそらく、「加阿忽」

の「阿」も)と同じく、《臨む、直面する》と対応しているのではない。これは日本語の動詞「サカ・フ」《逆》の語幹と比較できる。

\*θaka > \*ha[h]a > \*ha (重音省略の形。語頭以外では .a となる)

この「加」と「阿」が双生語 (doublet = 同源二語) の関係にあることは、すでに述べたとおりである (同上『書報』48号、拙論11頁)。

なお、はじめの「烏斯」《猪》の「～ス」\*+s (< \*+sa) は指小辞で、日本語では接頭辞「サ～」《小～、狭～》になる。「烏」o は日本語の「キ」wi 《猪》と比較し得るが、日本語の場合、祖形は \*uj ではなく \*uwī であろう。そうなると、高句麗語では \*oe のような語形であられる可能性が高いが、「烏」o であれば、祖形は \*uwa のような形になり、むしろ沖縄語 ?waa 《豚》に近い<sup>(3)</sup>。

このように、高句麗語の祖形 \*a に対して日本語 i (< \*i) が対応している例として、他に《道》をあらわす高句麗語「都」to (< \*ta) に対する日本語「チ」(< \*ti) や、《兎》をあらわす高句麗語「烏斯含」o.sa.ham (< \*os.x+am < \*usaŋ.k+a+kama 《兎・穴?》) に対する日本語「ウサギ」(< \*usaŋ.ki) があげられる。

#### b. 《雉嶽》

‘誤分析’の代表的な例としては、他に《雉嶽》をあらわす「刀臘」(発音 to.rap) もあげる必要があるだろう。

雉澤縣、本高句麗刀臘縣。景德王改名、今白州。(卷第35、漢州、海臯郡)

刀臘縣、一云雉嶽城。(卷第37、「地名表」)

「地名表」では「刀臘」は《雉嶽(城)》をあらわし、高句麗語の《嶽=岳》は「押」ap であるから、to.rap は tor+ap と区切るのが妥当であろう。したがって《雉》は、単独形にすれば tol という形になり、上代日本語の「トリ」tōri 《鳥》の形に接近することになる<sup>(4)</sup>。

日本語の「トリ」には、鳥類一般の他に《鷄、雉》も意味することがあるが、tōri の母音 ö が前舌母音 (便宜的に「陰母音」とする) である

のに対し、tol の o は後舌母音（同じく「陽母音」とする）であるという点に違いがある。

高句麗語の単音節語の母音 o は u か a にさかのぼり得るが、to が \*tu にさかのぼる可能性は低い。日本語の「ツ」tu は高句麗語では c (= ts ~ ʃ) という形に反映されているからである。

高、「租」co 《鴿鵒 (= フクロウ)》: 日、「ツク」 < tuku 《ミミズク》

高、「～次」+c 《(連体助詞)》: 日、「～ツ」 < +tu 《～の》

一方、上代日本語のオ列乙類の「ト」tō は、高句麗語では tə ~ tī の音に反映されている。

高、「冬於」tirə < \*tə:rə < \*tuə:rə < \*tūärä < \*tö-rä 《取》: 日、  
「ト・ル」(未然形「ト・ラ」 < tö-ra) 《取》

高、「冬音」\*tirim < \*tə:rīm < \*tuə.mil < \*tūä.malj < \*tö-maj 《休》:  
日、「ト・ム」(未然形「ト・メ」 < tö-mē) 《止、留》

したがって、tol は \*tuR ではなく、\*taR (R は流音) のような祖形を再構でき、当時の発音としては、母音 a がやや弱化した \*taI と復元できる。朝鮮語の tal < taI+k 《鶏》もこれと関係があると見られるが、発音が接近している点で、この時期をさかのぼる近い過去に一方から他方へ借用された疑いが残る。

日本語の「オ列乙類」の母音が高句麗語の祖形で陽母音になり得る例として、他にもいくつか挙げられる。

高、「沙非斤」\*sapik < 「沙伏」\*sapak < \*sapak ? 《赤》: 日、「ソホ」söfo < \*säpä 《赭 (= 赤土)》

高、「自」ca < \*ca 《伊 (これ)》: 日、「ソ」 < sö < \*cä 《其 (それ)》  
「刀臘」\*taI+ap の後半の ap 《嶽》は、他の高句麗語「押」ap (< \*jaba < \*daba) 《岳》と同じで、日本語の「ヤマ」《山》、モンゴル語の daba.γan 《嶺》と対応し得る。

なお、「刀」to を「尸」si のあやまりとし（「尸臘」sirap と読む）、日本語の「シラ～」「シロ」《白》と比較する意見があるが<sup>(5)</sup>、この地が《“白”州》と改名されたのは高麗時代（10世紀）になってからであるという点に問題がある。

また、日本語の CiCa ~ CiCo (C は子音) が高句麗語では C<sub>2</sub>aC<sub>1</sub>e (子

音Cの右下の番号は祖形の配列の順番)のような音と対応している点を考えれば、このことばだけ音韻変化の原則から外れることの合理的な理由を説明できない。

高、「波衣」\*pa'e < 「波兮」\*pahe < \*pahi < \*hipa 《巖》：日、「イハ」《岩》

高、「波衣」\*pa'e < 「波兮、波害」\*pahe < \*paki < \*kipa 《岨 (= 峠)、額》：日、「キハ」《際》

高、「奈兮」\*nahe < \*nahi < \*laθi < \*θila 《白》：日、「シロ」(合成語では「シラ～」)《白》

そもそも、『三国史記』の刊本で「刀」が「尸」となっている例は確認されない(後図参照)。また、「尸」は語末、あるいは音節末の流音(.r / .l)を表記するのに用いられた文字である。高句麗の地名に関する限り、「尸」が語頭で使われた例も si (= ci / ji) のように読まれた例も見出せない。

### c. 「助攬」《眞安》

この地名は、「地名表」では漢訳名が見られず、統一新羅時代(景德王16年=757)の改名では《眞安》となっている。

眞安縣、本高句麗助攬縣。(眞安縣、もと高句麗の助攬縣〔なり〕)  
(卷第35、溟州、野城郡)

助攬郡、一云才攬。(助攬郡、あるいは「才攬」といふ)(卷第37「地名表」)

「攬」と「攬」はいずれも lam であり、音をあらわしていたと考えられる。「助」は co と読まれるが、卷37「地名表」の例によって「才」cʌj と読まれたのであれば、.ʌj ~ .ij ~ .jəj の韻は \*e のような音を復元することができるので、「助攬」cʌj.lam は \*ceram に近い発音を推定することができる。これは \*cer ~ \*cel と \*am に分解することが可能である。

前半の \*cel 《眞》は、母音 e が \*i にさかのぼることを考えれば、\*ciRV (Rは流音、Vは母音で a ではない) のような形にさかのぼり得る。これ

は日本語の形容詞「シル・シ」《著 (=はっきりしている [ところの])、  
確かな》の語幹と比較できるかもしれない。

\*cel < \*ciru ~ \*cilu

これと同様の音韻変化 (\*CiCu > \*CeC ; Cは子音) を遂げたものは下の  
とおりである。

高、「兮次」\*hec < \*hitu 《五》：日、「イツ」< \*[h]itu 《五》

高、「買戸」\*mel < \*Nbiru 《蒜》：日、「ヒル」firu < \*piru / \*biru  
《蒜》

ちなみに日本語の色彩名「シロ・シ」(合成語「シラ〜」)《白》は、語  
源的には別のように思われる(高句麗語「奈兮」\*nahe < \*laθi < \*θila  
《白》)。

実は、新羅の地域に属するとされる地名にも似たような例が見られる  
が、これも統一新羅時代の改名形に基づく。現在この地は「眞安縣」  
(<助欖縣)と同じ行政区域(慶尚北道青松郡眞寶面；1980年代の頃のも  
の)の中にあり、三国時代以前の'諷名'は確認されない。本来、新羅語  
に近い韓系の地名の音を高句麗語の知識で解釈した可能性は排除できな  
い。

眞寶縣、本柒巴火縣。(眞寶縣は、もと柒巴火縣 [なり]) (卷第34、  
尚州、聞韶郡)

「柒」c<sup>h</sup>il は「七」の異体字 (=大字) としても使われるが、もし、こ  
れが《真》をあらわしていたとすれば、\*cel よりも古い音を反映してい  
ると言える。「寶」po (< paw) は、「巴火」p<sup>h</sup>a.pil (> \*paβil) と部分的  
に近い音で、縁起のいい意味の字として採用されたのであろう。

「助欖」\*cel+am の後半の \*am が動詞であれば、\*cel は副詞(日本語  
では「シル・ク」《はっきりと、確かに》)になろう。\*am 《安(やすん  
ずる)》は、日本語の動詞「ヤハ・ス」《和(やわらげる)》の語幹と対応  
するかもしれない。

高、\*am- < \*jaNba- 《安》：日、jafa- < \*japa- 《和》

d. 「助乙浦」《道臨》

拙論の第一篇（『東洋文庫書報』47号、13頁）では《道》をあらわす「都」to について論じたが、他にも《道》を意味することばが存在する。

道臨縣、一云助乙浦。（道臨縣、あるいは助乙浦といふ）（卷第37、地名表）

「都」to 《道》の場合、高句麗語の音韻変化の規則を当てはめれば \*ta（日本語「チ」< \*ti 《道》の母音変異形か）のような祖形にさかのぼると考えられるが、「地名表」以前の資料を残していない以上、漢語「道」（< daw）からの借用が疑われる余地も残している。

高句麗語で《臨む》ということばは、「阿」a（「烏阿忽」《津臨城》）になるが、「助乙浦」co.il.p<sup>h</sup>oの場合は、より狭い音o（「浦」p<sup>h</sup>oの母音の部分。修正形\*[h]ʌ）になっている。語末母音.oを除いたco.il.p+が《道》をあらわしたことばであろう。「助」はcoと読まれるが、上代日本語の万葉仮名では確認できないものの、共通の声符の「鋤」は「オ列乙類」の「ゾ」（< zō < \*dzjio）の音をあらわし、また、以下の例から\*cəのような音で読まれた可能性が高い。

『翰苑』の写本の「高麗」の条の注では、官名《道使》を「處閭匹刺史」と言ったことが見えるが、「刺史」はそれに近い概念を唐（あるいはそれ以前）の官制の用語で説明したものであろう。おそらく、その直前に「比〜」《（〜に）比す》という文字が入ると考えられる。これは、『通典』に見える「處閭近支」にあたり、「近」は「匹」の誤記であろう（< 「處閭匹支」?）。

諸城置處閭近支、比刺史。亦謂之道使。（諸城、「處閭近支」を置き、刺史に比す。亦〔また〕之〔これ〕を《道使》といふ）『通典』（卷186、「邊防」2、東夷・高句麗）

「匹」の上の部分、「兀」が「兀>天>下>斤」と'修正'され、左下の部分、「L」が「L>ㄣ>ㄣ」と'修正'されたのではないか。『翰苑』は、

筆写上の誤りと見られる部分が少なくないが、この場合は『通典』の方にも誤記があると考えられる。ちなみに、『翰苑』注に見える官職名《郡頭》を意味する「末若」は、『通典』では「末客」となっている（『通典』には漢訳名《郡頭》の記述はない）。これも漢語的な意味として理解されやすい形に‘修正’されたのであろう。

「處閩匹支」*cḥərjə.pil.ci*のうち、「閩」*rjə*は、声符が共通する上代日本の万葉仮名（呉音系）の「呂」が「オ列乙類」の「ロ」*rö*（または *rə*）をあらわしたことを考えると、前の *cḥərjə.p+* は \**cə[ɹ]rəp* に近い音で読まれたのではないか。これは「助乙浦」\**cəlp.[h]ʌ* の前半の \**cəlp* よりも、やや古い音を反映しているように見える。なお、《北扶餘城州》の別名「助利非西」の「西」*sja* は《城》をあらわす「省」*sjəŋ* の収縮形と考えられるが、「助利非」*co.ri.pi*（修正形 \**cəripi*）自体の発音は、《道》をあらわす \**cəlp* < \**cə[ɹ]rəp* に似ている。

後ろの +*ilci* は、古代テュルク語の *ilci* 《使者》に酷似しているが、高句麗語内部で形成・発展したことばである可能性も排除できない。まず、語末の「支」+*ci*（修正形 \*+*cī*）は年齢や地位が高い人物をさす接尾辞的な要素（官職名に多い）として使われたのであろう。これは「車」*ca* 《上》と対応し、接尾辞的に付加されたことで母音が弱化したものと考えられる（\*+*ca* > \*+*cʌ* > \*+*cī*）。

「莫何（何）羅支」《太大兄》（『翰苑』「高麗」の条の注、以下同）

「失支」《小兄》

「莫何邏繡支」《大幢主》

その前の +*il* は、+*il* と読む場合《烽》を意味する「乙省」の「乙」*il* と比較できるかもしれない。これは日本語「ノ・ル」《宣、告》の未然形「ノ・ラ」(< *nō-ra*) と対応し、《(口頭で) 伝える、知らせる》という意味をもっていたものと考えられる。人名（姓）の「乙支」*ilci* も発音が酷似している。

*il* < \**ər* < \**uərə* < \**jüärä* < \**n'ö.rä*

\**cəlp* は、日本語「トホ・ル」《通》の未然形「トホ・ラ」(< *tōfo-ra*) と対応し、《開（ひらく）》をあらわす高句麗語「冬比」と‘双生語’（doublet）の関係にあると考えられる。おそらく、動詞から名詞への意味のちがいが



を明確化するために、語頭の t の音が<sup>o</sup>口蓋化 (\*tö > \*tüä > \*t'uə > \*cə:) したのであろう。

\*cəlp < \*cə:rəp < \*t'uərəp[ə] < \*tüäp[ä].rā < \*töpä-rä ? /

\*tülpi 「冬比」 < \*tə:rpī < \*tuər[ə]pə < \*tüäpä.r[ä] < \*töpä-rä

日本語でも《道》を意味することばとして、「チ」《道、路》に対する動詞「トホ・ル」《通》の連用形 (= 名詞化) 「トホリ」《通路》の存在が参考になろう。

e. 「奈生於」《竹唄》

高句麗語では、ふたつの鼻音 (N) に挟まれた母音 (V) の弱化にともなって、音節を形成する鼻音 (M と表記。現代日本語「ン」の単独形の発音に近い) に変化したものも見られ、語頭では「仍」ziŋ と表記される (NVN > M)。

「仍」\*M < 「奴音」\*nΔm < \*nam[ba] 《陰》: 日本語「ナバ・リ」《隠》

「仍」\*M < \*nən[u] ? 《旌》: 日本語「ヌノ」(方言形「ニノ」) 《布》

「仍斤」\*Mk < \*namk 《槐》: 中期朝鮮語 namo < \*namok 《木》(主格形 namki 《木が》)

「仍伐」\*Mpil < \*mΔmbΔlj < \*NboNboj (< \*Nbuaj+Nbuaj) 《穀》:

日本語「モミ」 < \*momoj < \*moj+moj ? 《粃》

日本語「モミ」《粃》は、《実、身》をあらわす「ミ」(< mi < \*mu, 合成語では「ム〜」) の複数か、集合名詞が基になっているかもしれない。なお、日本語の「ミ」《実》は、南島祖語の \*bu'ah (異形 \*bu'ai) 《果实》と比較する説が注目される<sup>(6)</sup>。

「仍」《陰》は「奴音」no.im (修正形 \*nΔm) が古い形で、ziŋ (日本漢字音の漢音「ジョウ」と対応) よりも \*niŋ (同じく呉音「ニョウ」) に近い音で読まれたこともわかる。これらはいずれも語頭および単独形であらわれる。それでは語中や語尾ではどうか。

《竹唄》を意味する「奈生於」na.sΔiŋ.ə (修正形 \*na.seŋ.ə) は \*nase+ŋə のように分析した方がいいのではないかと考えられる。「奈生」が日本語の「シノ」(< sino) 《篠 (= 小竹)》と対応することは、これまで述べてきたところであるが、naseŋ よりも nase (< \*sina) の方がより正確で

あろう。

高、「奈兮」\*nahe < \*nahi < \*laθi < \*θila 《白》：日、「シロ・シ」（シラ～）《白》

高、「波衣、波兮」\*pa[h]e < \*pahi < \*hipa 《巖》：日、「イハ」《岩》

高、「波衣」\*pa'e < 「波兮、波害」\*pahe < \*paki < \*kipa 《岷、額》：日、「キハ」《際》

《岷（＝峠、崖？）》をあらわすことばは「波衣」「波兮」（\*pa'e ～ \*pahe）以外に、「～文」+mīn という形が知られている。

翼嶺縣、本高句麗翼岷縣。（翼嶺縣は、もと高句麗の翼岷縣〔なり〕）  
（卷第35、溟州・守城郡）

翼岷縣、一云伊文縣。（翼岷縣、あるいは「伊文縣」といふ）（卷第37、「地名表」）

これは《梁》をあらわす「～勿」（日本語「ハリ」《梁》と対応）と通用したようであるが、それは結果的にそうなったのであり、語源的には別であった可能性が高い。音韻的には「文」mīn よりも「勿」mīlの方が古い形を反映しているように見える。鼻音 m の影響で語末の l が鼻音化 (> n) したのであろう。

嶂梁縣、本高句麗僧梁縣。景德王改名、今僧嶺縣。（卷第35、漢州・鐵城郡）僧梁縣、一云非勿。（卷第37、「地名表」）

意味は異なるが、「勿 > 文」の変化を見せているのが「乃勿」《鉛（＝青金）》の「勿」に対する「蘇文」《金（＝黄金）》の「文」であろう。これは《鉄》を意味する「毛乙」\*māl や日本語「ナマリ」《鉛》の「～マリ」（< \*+mal）と対応し得る。

\*mal > 「毛乙」\*māl > 「～勿」+mīl > 「～文」+mīn

「奈生於」\*nase.ŋə の +ŋə 《岷》は +mīn がさらに収縮した形で、ŋ は二つの鼻音にはさまれた母音が弱化したことによって成立した、音節を形成する鼻音 M の代償形であろう。ŋ の後に母音 ə（または i）が存在

するのは、《梁》を意味する「勿」と違って、本来二音節のことばであったことを示している。「勿」も「文」もその省略形の可能性が高い。これは日本語の「ムネ」（合成語「ムナ〜」）《棟、胸》と対応するかもしれない。

+ŋə (= \*+ŋ[ŋ]i) < 「文」 \*min[ni] < 「勿」 \*mil[ni] < \*malni < \*monil  
< \*munɔlj < \*munaj

このことばの音韻変化は、《峰》をあらわす「首泥」「述尔」と平行している。

高、「首泥」 \*sju[n]ni < 「述尔」 \*sjulni < \*sjunil < \*si'unɔlj < \*unaj+si  
：日、「ウネ」《畝》、「ウナジ」《項》：朝鮮語、sunilk < \*sjunil+k  
《嶺》

高句麗語では、二音節語のうち本来語末にあった半母音 j が流音化して第一音節の末に移動した例はすくなくない。

高、「骨尸」 koll < \*kolri < \*koril < \*kurɔlj < \*kuraj 《朽（こて）》  
：日、「クレ」《樽（=板材）》

高、「骨衣」 kor'e < \*kolji < \*kojil < \*kujɔlj < \*kujaj 《荒》  
：日、「クエ」（「クユ」の未然・連用形）《崩》

高、「〜忽次」 \*+hole < \*kolc < \*kultu < \*kutulj < \*kutuj 《口》  
：日、「クチ」（合成語「クツ〜」）《口》

《口》の異形「古次」「申」（いずれも \*koc）は、\*kolc の段階で流音 l が後の子音 c に同化したものであろう（\*kolc > \*kocc > \*koc）。

## まとめ

今回は前回に続き、高句麗語の特殊な音韻変化として、非鼻音化と鼻音の消滅をとりあげた。また、漢字表記に付随する問題点として、漢字の音節の切れ目と合成語の切れ目が一致しない、いわゆる‘誤分析’（あるいは‘異分析’）の例もとりあげた。

今回とりあげた例によって、高句麗の‘南界’（朝鮮半島中部地域）と鴨緑江以北の地域の地名が共通しているものであれば、それは‘高句麗語’として認識して問題はないことと、『翰苑』やその他高句麗が存在し

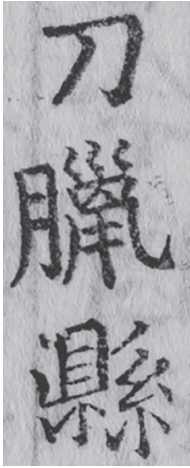
ていた七世紀以前の中国史料に残された高句麗語と共通しているものも、高句麗語として扱って問題ないことが理解されたと思う。

註

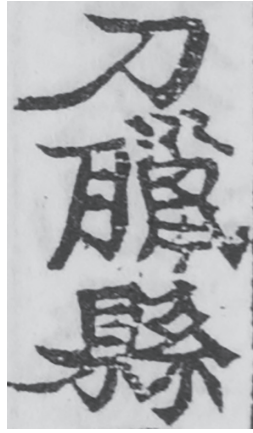
- (1) 李基文「高句麗の言語とその特徴」IV.「語彙の特徴」(5) (『白山学報』4号、白山學會、1968年所収) 129頁。
- (2) 東條操『全国方言辞典』東京堂出版、昭和26年〔1951〕、641, 645頁。
- (3) 国立国語研究所編『沖縄語辞典』(『国立国語研究所資料集』5、大蔵省印刷局、昭和58年〔1983〕〔7刷〕) 581頁。
- (4) 朴炳采「古代 三國の地名語彙攷：三國史記地理志の複数地名を中心として」(『白山学報』5号、白山學會、1968年所収) 89頁。ただし《嶽》の説明はない。
- (5) 村山七郎「高句麗語資料および若干の日本語・高句麗語音韻対応」(『言語研究』42号・「第46回大会研究発表報告要旨」日本言語学会、昭和37年〔1962〕所収) 70頁。ただし、疑問符〔?〕を付しており、慎重な見方を示している。
- (6) 村山七郎『日本語の語源』弘文堂、昭和49年〔1974〕、8頁。

参考史料(補)

金富軾著・井上秀雄訳注『三国史記』3〔東洋文庫454〕、平凡社、1986年。  
竹内理三校訂・解説『翰苑』吉川弘文館、昭和52年〔1977〕所収、写本の影印。



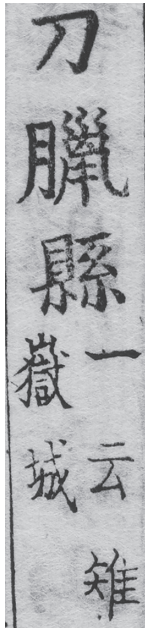
①の刊本（卷35）



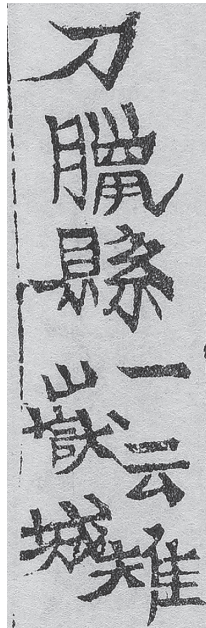
②の刊本（卷35）



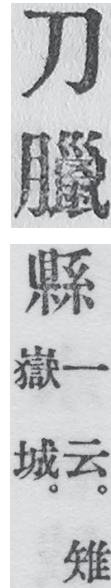
③の刊本（卷35）



①の刊本（卷37）



②の刊本（卷37）



③の刊本（卷37）  
（二頁に渡る）

図1 刀臘縣（部分を拡大）

今鹽州領縣一雒澤縣本高勾麗刀臘縣景德  
王改名今白州

瀑池郡本高勾麗內米忽郡景德王改名今海

州重盤郡本高勾麗息城郡景德王改名今安

州捷岳郡本高勾麗鶴岳郡景德王改名今鳳

州五關郡本高勾麗五谷郡景德王改名今洞

州領縣一獐塞縣本高勾麗縣景德王因之今

遂安郡

取城郡本高勾麗冬忽憲德王改名今黃州領

縣三土山縣本高勾麗息達憲德王改名今因

図2-1

刀臘縣①の刊本 (卷35)

長淵今因之	今豐州	冬忽	乃忽	弓忽	冬音忽	忽多知	高木根縣	阿忽	屈於押
麻耕伊今青松縣	關口今儒州	冬忽	鴿	内米忽	監城	水谷城縣	乙斬	穴口郡	紅西云
楊岳今安	栗口	今達	一	一	刀臘縣	旦忽	比	冬比忽	甲
	今殷栗縣	仇乙峴	獐塞縣	漢城郡	嶽城	十谷縣	新	冬音奈縣	比言次
		所於	一	一	五谷郡	頓忽	大谷郡	休陰	德勿縣
		屈遷	一	一	一	一	一	一	津臨城縣

圖 2-2  
刀臘縣①の刊本 (卷37)

海軍郡本高句麗冬三一作忽郡景德王改名  
 今鹽州領縣一確澤縣本高句麗刀臚縣景德  
 王改名今白州  
 瀑池郡本高句麗內米忽郡景德王改名今海州  
 重盤郡本高句麗息城郡景德王改名今安州  
 拙岳郡本高句麗鶴西郡景德王改名今鳳州  
 五開郡本高句麗五谷郡景德王改名今洞州  
 領縣一獐塞縣本高句麗縣景德王因之今遂  
 安郡

図3-1  
 刀臚縣②の刊本（卷35）



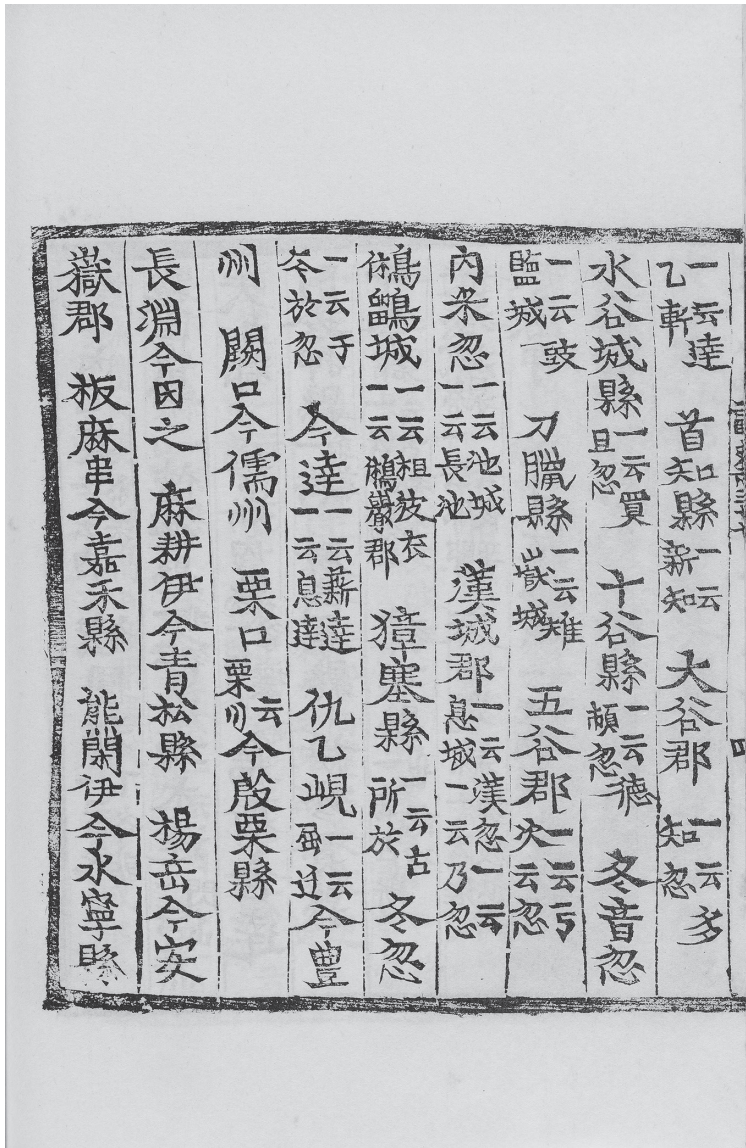


図3-2

刀臘縣②の刊本（卷37）

神田本近衛  
 本江陰作泣  
 陰文獻備考  
 作泣陰注云  
 五一作江輿  
 地勝覽亦作  
 五陰泣蓋五  
 說今從新刊  
 本  
 神田本檀溪  
 作漢溪今從  
 近衛本及新  
 刊本  
 神田本近衛  
 本鎮瑞作鎮  
 瑞今從輿地  
 勝覽及新刊  
 本

三國史記  
 卷三十五

名。今因之。

海口郡本高句麗穴口郡。在海中。景德王改名。今江華縣。領縣三。  
 江陰縣本高句麗冬音奈縣。景德王改名。在穴口島內。今河陰縣。  
 喬桐縣本高句麗高木根縣。海島也。景德王改名。今因之。守鎮縣。  
 本高句麗首知縣。景德王改名。今鎮江縣。  
 永豐郡本高句麗大谷郡。景德王改名。今平州。領縣二。檀溪縣本  
 高句麗水谷城縣。景德王改名。今挾溪縣。鎮瑞縣本高句麗十谷  
 城縣。景德王改名。今谷州。  
 海阜郡本高句麗冬<sub>音一作</sub>忽郡。景德王改名。今鹽州。領縣一。雉  
 澤縣本高句麗刀臘縣。景德王改名。今白州。

圖4-1  
 刀臘縣③の刊本 (卷35)

神田本乎作  
 半新刊本與  
 地勝覽及原  
 本地理第二  
 作平近衛本  
 與本書同  
 默疑點訛  
 加賀本僧梁  
 作僧梁神田  
 本作備梁今  
 從原本地理  
 第二及新刊  
 本  
 加賀本牛嶺  
 作羊嶺神田  
 本作羊嶺今  
 從近衛本新  
 刊本及輿地  
 勝覽  
 近衛本新刊  
 本泥沙波忽  
 作泥沙波忽  
 神田本新刊  
 本鼓盪作鼓  
 盪

郡	馬一忽云	七重縣	隱一云	波害乎史縣	領一云	泉井口縣	於一云
單買	述余忽縣	泥一忽云	首	達乙省縣	漢氏美女於高山頭默烽火	鐵圓郡	乙冬云
臂城郡	馬一忽云	內乙買	余米云	鐵圓郡	乙冬云	梁骨縣	後名高烽
僧梁縣	非一忽云	功木達	四一云	夫如郡	於斯內縣	牛岑郡	斧一填云
斯含達	阿珍押縣	窮一云	嶽	所邑豆縣	伊珍買縣	牛岑郡	云一
牛嶺一云	首知衣	獐頂縣	也一忽云	長淺城縣	一云	麻田淺	夜一云
縣	沙一云	扶蘇岬	若只頭恥縣	一云	湖頭	屈於押	紅一云
冬比忽	德勿縣	津臨城縣	阿一忽云	穴口郡	比一云	冬音	甲一云
奈縣	休一云	高木根縣	乙一云	首知縣	新	大谷郡	知一云
水谷城縣	且一忽云	十谷縣	頓一忽云	冬音忽	鹽一云	刀臘	城一云
且一忽云	買	十谷縣	頓一忽云	冬音忽	鹽一云	刀臘	城一云

圖4-2a  
 刀臘縣③の刊本 (卷37a)

縣嶽一云雉 五谷郡次一云今 內米忽一云池城 漢城郡漢一忽

一云 乃息忽城 鶴鷓城一云租波衣 獐塞縣所於古 多忽于一多

忽於 今達一云薪達 仇乙峴屈一迂云 今豐州 關口今儒州 栗

口栗一 川今 殷栗縣 長淵今 因之 麻耕伊今 青松縣 楊岳今

安嶽郡 板麻串今 嘉禾縣 熊閑伊今 水寧縣 甕迂今 甕津

縣 付珍伊今 永康縣 鷓島今 白嶺鎮 升山今 信州 加火

押 夫斯波衣縣史一仇 牛首州次首一作頭一云鳥根乃首 伐力川

縣 橫川縣斯一買於 砭峴縣 平原郡原北 奈吐郡大一云 沙

熟伊縣 赤山縣 斤平郡並一平云 深川縣斯一買云伏 楊口郡云一

要隱 猪足縣斯一云鳥 王岐縣次一云皆 三峴縣波一云密 狹川

新刊本今火 云忽作弓火 云忽神田本 作今次云忽 輿地勝覽作 于次吞忽文 獻備考註云 一云弓火又 于次吞忽 神田本新刊 本長城作長 池近衛本作 長地 神田本新刊 本砭峴作磁 峴 神田本近衛 本地理第四 王岐作玉岐

図4-2b 刀臘縣③の刊本 (卷37b)